

表現する身体と非同期の世界

西 洋子*

東洋英和女学院大学 人間科学部

Expressive body and asynchronous world

Hiroko Nishi*

Department of Human Sciences, Toyo Eiwa University

* Corresponding Author: hiroko@toyoeiwa.ac.jp

概要

本稿では、年齢や性別、障害の有無や表現の経験等の異なる人々による創造的な身体表現のワークショップの実践手法を、オンサイトー〈リアルタイムである〉からオンラインー〈リアルタイムではない〉へと転換することで逆照射されることとなった「表現する身体は非同期の世界に何をみいだすのか」について、実践の内にある者の立場から論じることを試みた。具体的には、新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態宣言発令直前である2020年4月2日から5月31日までの約2か月間、東京都と宮城県を拠点とする2つの団体とそれらに関連する人々がオンラインー〈リアルタイムではない〉で行った表現を対象に、やりとりした174の表現映像を検討した。本実践において、著者自身の身体を基盤に、意識に浮かび上がってきた事柄を「心理的時間の動態」、「感覚以前」、「不確定さ」という3つのキーワードから検討した結果、表現する身体は、心理的時間の動態や身心の共振を感受すること、他者や環境とのかかわりの中で感覚以前に沿って行為すること、さまざまな感情のもとに不確定さを求めること等によって、常に新たに表現を生成し続けていくことが明らかとなった。

キーワード

身体、表現、社会実践、オンライン、非同期の世界

Abstract

Following workshops for creative physical expression by people of different ages, genders, disabilities, and experiences of expression, the author attempts to discuss, from the standpoint of those who are actually in the practice, “what the expressive body find in the asynchronous world?”, which is something that does not sufficiently rise to consciousness under the onsite (being in real time) settings but surfaces in it by shifting the method of the workshops from the onsite settings (being in real time) to those of the online (not being in real time). Specifically, during the two-month period from April 2 to May 31, 2020, just prior to the state of emergency to prevent the spread of the new coronavirus infection, the author has examined 174 expressive images that have been exchanged online (not being in real time) among two organizations based in Tokyo and Miyagi Prefecture and people involved in those groups. In this practice, based on the author's own body in the practice, the author has examined the things that comes to her consciousness with the three keywords of “the dynamics of psychological time,” “the pre-sensory,” and “indeterminacy” in mind. As a result, it becomes clear that the expressive body continues to generate new expressions by sensing the dynamics of psychological time and the resonance of body and mind, by acting in accordance with the pre-sensory state in relation to others and the environment, and by seeking indeterminacy while feeling various emotions.

Keywords

Body, expression, social practice, online, asynchronous world

1 はじめに

私たちの身体が他者と共にあるとき、意図的な行為

による伝達はもとより、意図を超えて表出するものも、自ずとかかわりはじめる。その源は「存在はしても表象とはならない何か」であり、「アフェクト」という語に

相当するような、感情に関連はするものの、例えば「さみしい、悲しい、嬉しい」といった言葉で他の人に説明できるものではなく、説明可能な範囲の前段階にうごめく意識化されない固まりのようなものである[河合 1998].

身体で表現を創り合う実践現場では、個々の固まりは、他者のそれや環境と相互に浸透し、つながり合ったり、途切れたり、ねじれたり、引き合ったり、弾けたりといった具合に関係を変化させながら重層化し、絶え間なく持続することで新しい表現が創られていく。本稿ではこのような関係性の動態を、表現する身体における非同期の世界とする。したがって、表現からみる非同期の世界とは、個々がバラバラな状態ではなく、私たちの生が創造され続ける動的な可能態であり、統一や整った形式によるものとは別の、独自の美しさとして感受される世界であるといえる[坂本 2017; 郡司 2019].

同期/非同期とは、時間に関する用語である。一般的に時間とは、刻まれる瞬間ごとの点が過去-現在-未来へと直線的に進んでいくような、空間的概念として捉え得る特徴をもつ物理的な時間を指し示す。一方で、人が生きる内実には、それとは別に、帯のように幅を持つ流動的な固まりがうねりながら持続する、いわば心理的時間が存在している[ベルクソン 2015]. 双方は、混交しながら、一人一人に固有な生と協働する社会生活の基底を支えているといえるであろう[村澤 2018].

本稿では、身体による表現を主題とする。表現とは、客観的存在であって、しかも主観的な意味内容を含んでいることに大きな特色がある[西田 1923]. そのため、物理的時間とは質的に異なる心理的時間を考察の対象に含める必要性が生じる。したがって以下では、表現を創りあう関係性において、物理的時間に関する区分には〈リアルタイムである〉/〈リアルタイムではない〉を用い、表現する身体が他者や環境と浸透し合い、流れながら生成を続ける心理的時間には同期/非同期を用いて、両者を言語使用上で区別して論じていく。なお、実践者としての著者は、私たちの生きる時間そのものは、物理的な時間を共有している〈リアルタイムである〉状況においてもそれぞれに固有であり、身体とその表現は、非同期的な時間の流れの重なりの中にも、出会いとしての共鳴や共振、そして、ズレや停滞、反発や断絶をも含みながら創造へと向かう交流をつくりだすはたらきを促すと考えている。なお、「共振」という用語は、一般的には物質間の電気振動の共鳴という物理的現象を指し示す。しかしながら哲学や心理学等の領域では、この言葉を異なる身体同士が相互に受動性と能動性を発揮し、それでいて共に揺れあっているような相互作用の

比喩として多く用いる。したがって本稿では、これらの領域での共振の使い方に基づいて、表現する身体相互の互いに影響し合う関係性から発現する一体感のある心理・身体的状況を共振と記述する[中村 1993; 市川 1997; 西 2012a].

新型コロナウイルスによる世界的なパンデミックは、身体が共にあることで自ずと活性化する、こうした動態の生成を強く阻む社会状況をもたらした。コロナ禍を生きる社会生活の実態を、私たちの生を構成する物理的時間と空間の2つから考えてみると、感染防止のための自粛や規制の対象となるのは、専ら空間的要素であることがわかる。私たちの日常生活の中で、人と人とが直接会うことやふれ合うことへの制限は、その代替えとしての社会のオンライン化を一挙に加速させ、教育や文化、医療、消費生活といった多様な社会的活動の形態は、現在もなお大きく変化し続けている。オンラインの対義語は、通常ではオフラインであるが、コロナ禍でのこうした実態を踏まえて、本稿では、空間的要素としてのオンラインの対義語として「対面」を示す「オンサイト」を用いることとする。

急拡大する社会生活のオンライン化は、これまでは当たり前〈リアルタイムである〉として実施してきたさまざまな活動に、〈リアルタイムではない〉という選択肢も存在し得ることを顕在化させた。例えば、教育では、Zoom等での授業に代表されるようなオンラインのリアルタイム型と〈リアルタイムではない〉オンデマンド型の双方が整備され、個々の学習者の状況や教育環境に応じた学びの選択に幅を広げた。もっとも、新型コロナウイルス感染症が日本社会に急拡大した初期、具体的には最初の緊急事態宣言が発出された2020年4月頃は、新年度をむかえた国内の教育機関の多くがオンラインでのリアルタイム型の環境を早急に整えることが難しい状況にあったことから、まずは学習者の「密」を避けるために、オンライン使用による学習空間の分断を優先し、これと〈リアルタイムではない〉という時間的要素の組み合わせを試行することに精一杯であったといえるであろう。

本稿では、年齢や性別、障害の有無や表現の経験等の異なる人々による創造的な身体表現のワークショップの実践手法を、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、オンサイトー〈リアルタイムである〉からオンラインー〈リアルタイムではない〉へと転換したことで逆照射されることとなった「表現する身体は非同期の世界に何をみいだすのか」について、実践の内にある者の身体を基盤に考えていきたい。本稿の前半では、本実践の社会的背景および本実践を行った2団体の概要

と、この手法で実践を継続した2か月間の活動の流れを紹介する。後半では、これまでの実践手法とは対極となるオンライン（リアルタイムではない）環境下でやりとりした表現映像が、実践の内にある著者自身の身体を通じて意識に浮上させた事柄を、「心理的時間の動態」、「感覚以前」、「不確定さ」をキーワードとして整理しながら、「表現する身体は非同期の世界に何をみいだすのか」について論じることを試みる。

2 背景と対象、および実践の流れ

2.1 本実践の社会的背景

コロナ禍では、身体接触を伴う活動は、感染防止の観点から行うことができない。2020年4月7日、国内の7都府県を対象地域とする緊急事態宣言が発令され、4月17日には全都道府県に拡大された。その後、北海道、埼玉県、千葉県、東京都及び神奈川県では、緊急事態措置が5月31日まで継続された。「新しい生活様式」という標語が象徴するように、私たちの日常生活には大きな変化が生じた。芸術・文化面への影響も甚大であり、劇場やコンサートホール等は、規模の大小にかかわらず休館を余儀なくされた。上演を目的とするパフォーマンスの中止と並んで、市民が主体的につくりあげてきた表現やアートの社会実践の多くは、活動の機会を自ら閉じ、再開の目途は全くたたない状況に陥ることとなった。

新年度をむかえたこの時期、企業活動や教育の現場ではオンライン化が一挙に加速した。その一方で、本稿で取り上げるような、多様な人々による小規模な社会実践は、これまで通りの活動継続が個々の生活にとって必須ではないことや、参加する人々のオンラインに対する経験知やインターネット環境がさまざまであることなどから、2020年春の段階で、身体性を含み込んだ活動内容を直ちにオンラインに転換することへは、到底踏み出せない状況を抱えていた。

その後、社会全体のオンライン化に伴い、Zoom等を使用して指導者が模範を示すようなオンライン（リアルタイムである）でのレッスン形式のワークショップは徐々に行われるようになった。これとは異なる、多様な人々が身体で表現を創り合うワークショップについては、2020年夏頃から実験的な試みとしてはじまった数例を確認することができる[九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ 2020；東京芸術劇場東京のはら表現部 2021]。

2.2 2つの団体と表現映像

本稿の考察の対象は、東京都（新宿区）と宮城県（石

巻市・東松島市）という異なる地域で「てあわせ」表現による創造的な表現ワークショップを展開している2つの団体（Fig. 1）が、新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態宣言発出による活動の中断を余儀なくされたのちに、実践手法をオンライン（リアルタイムではない）に転換して、4月2日から5月31日までの約2か月間、表現映像の交流を行った際の表現である。



Fig. 1 本実践を行った2つの団体：団体A（上段）と団体B（下段）

「てあわせ」とは、物理的な時空間を共にする身体相互の直接的な接触を主軸に、身体を受動性と能動性をやりとりしながら即興的に表現を創りあう実践手法であり、著者が30年あまり継続してきた身体表現による社会実践の中核的な表現手法である[西・三輪 2016；三輪 2019]。人の手は、身体部位の中でも外部世界と親密に関わる多様な動きを有しており、それでいて手心といった言葉が示すように、心がにじみ出る部位である[西 2012b]。「てあわせ」には、定まった動きやルールがないことから、年齢や性別、経験、障害の有無にかかわらず、誰もが対等な立場で直感的に自由な表現を創り合うことができ、この特性から多様な人々による社会実践が容易となる。

2つの団体のうち東京都で活動する団体Aは、インクルーシブな身体表現を行う特定非営利活動法人である。設立は1998年であり、年齢や性別、表現の経験や障害の有無等の異なる多様な人々が参加している。一方の宮城県で活動する団体Bは、「てあわせ」を主活動とする身体表現の任意団体であり、東日本大震災後の2012年より関東からの支援者と被災した発達障害児・者とその家族、現地の教育・福祉関係者らが集う場として徐々に形づくられ、数年前からは現地の人々が主体となって活動が企画・運営されている。コロナ禍以前は、両団体とも月に1・2回の表現ワークショップを継続しており、毎回の活動には、多様な市民30-50名程度が参

加している。著者は、両団体の設立メンバーであり表現ファシリテータである。両団体はこれまでも緩やかな連携を保ち、年に1・2回の直接的な交流を継続してきた。なお、本実践に参加した団体A・Bの各メンバーは、これまでの直接の交流の機会を通じて、既にお互いを知っている者同士もいたが、全く会ったことのない者もいて、参加者の関係性は一様ではなかった。

また、本実践での表現映像とは、感染が拡大する社会状況下で、両団体のメンバーの各々が、身近な生活の中で人以外と向き合い、これまで継続してきた「てあわせ」を想起しながら身体で自由に表現する様子を、自身や家族、福祉施設の先生方が撮影した動画や静止画を指し示す。オンサイト（リアルタイムである）でのワークショップにおける「てあわせ」が、共に創り合う相手を次々と自在にかえながら、外部からの時間的制約をできるだけ設けずに進行することに比べて、オンライン上で送り合うことを前提とする本実践での表現は、「生命感のあるひと流れの動き」[松本 2008]として一人ひとりの表現感を損ねない長さであることを前提としながらも、屋内だけでなく屋外での撮影や福祉施設内での数名の同時撮影等でも無理なく継続して撮影できることや、参加者ごとに大きく異なるインターネット環境で支障なく送受信できるデータ量に収めることに配慮して、動画の場合でも20秒程度の長さを目安としてはどうかということ、4月初旬の段階で話し合った。コロナ禍を契機に新たに試みることとなったオンライン（リアルタイムではない）という実践手法において、こうした緩やかな制約を設けたことで、個々の表現は時間的に短く区切られて集積されることとなり、本稿では、それらを考察の対象とすることが可能となった。

2.3 実践手法の転換の契機

両団体は、感染防止の観点から、2020年2月からオンサイトでの表現ワークショップを中止していた。本実践を開始した直接の契機は、著者が2020年4月2日に団体Aのメンバー（NPO法人の正会員）に送った「石巻の団体Bの人たちと、何らかの方法でつながることはできないだろうか？」というe-mailである。この段階では、問いかけた著者自身には、「何を」「どのように」という具体案は全くなかった。

2つの団体は異なる地域を拠点とする別々の活動であるため、それぞれの団体内で感染対策を講じた実践を模索することもできたが、両団体ともに子どもから高齢者、障害のある人々を含む多様な人々が参加者であり、身体接触を伴うオンサイトでの活動には感染予防上の大きなリスクが生じるため、活動を継続する場

合には当面はオンラインにするしか方法はないと思われた。しかしながら、先述の通り、個々の参加者のオンラインの経験知はさまざまであり、例えばFacebook等で日々の様子を送受信している者がいる一方で、SNSはほとんど使用しない者がいることや、仕事で当たり前パソコンを使いこなしている者がいる一方で、パソコン自体もっておらず携帯電話等で情報のやりとりをしている者がいるといった状況であった。さらに、特に団体Bの主たるメンバーである発達障害児・者らは、自ら言葉を発することが困難であり、震災後のつながり感の再構築に際して、言語的交流には馴染まないことから身体表現での交流が試みられ、10年あまりにわたって活動を継続している経緯がある。このように、実践現場をオンラインに切り替えての活動継続を想定すると、そこに生じる多様性の幅は、年齢や性別、障害の有無等に加えて、インターネット環境やオンラインの経験知、映像撮影や映像視聴への興味関心等、これまでのワークショップ以上に広がることから、この段階では、オンライン（リアルタイムである）はもとより、いくらかは馴染みのあるオンライン（リアルタイムではない）であっても、実践手法の転換を実現するには多くの課題が予想された。

一方で、両団体でファシリテーションを担う著者としては、感染収束の目途が全く立たない状況が続くなかで、ワークショップの中断を放置したまま何もしないよりも、うまくいかなくても遠隔地相互をオンラインでつなぐような新しい表現実践を試みることで、この時期の表現と位置づけることはできないだろうかという漠然とした思いがあった。

2.4 2か月間の表現交流の流れ

4月2日から団体Aのメンバー7名で開始したe-mailでの意見交換に対して、翌日には一人のメンバー（A3:以下、e-mailの発信順に団体別と個人別に記号と番号を付与）から「何本かの動画を集めて見せ合ってはどうか」との提案がなされた。団体A内では、少し前に開催したイベントに都合で参加できないメンバーが個々に動画を撮影してそれらをつないだメッセージ動画を作成したことがあり、A3の提案はこの経験から為されたものであった。ただ、この時点では、団体A・B間で自由に表現映像を送り合うことは想定されてはおらず、まずは自身がいくつかの動画を撮りため、その後に団体A内で見せ合い、そののちに団体Bと交流の機会をつくるといった趣旨であったと受け取られる。4月6日に著者は、試しに屋外と屋内での「てあわせ」の10秒程度の動画2本を撮ってみた。提案者であったA3も屋内での動画1本を撮ったとのことで、団体Aのメンバーに

対して e-mail 添付でそれぞれの表現映像を送り合った。動画を共有することで、団体 A 内では、新たな実践手法の候補となりそうな表現映像とは「こんな感じのもの」であることが、具体性を帯びて受け取られた。翌4月7日には、団体 B で継続してワークショップに参加し、現在では運営の中核を担っているメンバー数名に対して、前日に撮影した屋外での表現映像を e-mail 添付で送ってみた。団体 B のメンバーたちからは、著者からの久しぶりの連絡に対して e-mail 文章での返信が次々と入り、何よりも大変な社会状況下でのお互いの無事に安堵した。またこの日、団体 B の一人 (B1) からは、早速に表現映像が送信された。

その後しばらくは、近況を知らせる文面とあわせて表現映像を e-mail に添付する試みが続いた。この間、動画サイズや保存形式等がバラバラであったため、「うまく見ることができない」、「送ることができない」といった声が、特に団体 B のメンバーから多く寄せられた。団体 A 内では、技術的対応が可能なメンバーを募って、動画サイズの圧縮や形式転換を試み、そのたびごとに個別の対応をとることで何とか 2 団体間の送受信が成立する環境が保たれていた。スムーズな進行とはいえない状況ではあったが、その時々生じた課題を解決に向けて試行錯誤したこの間、団体 A・B の各々のメンバーの中に、普段は離れた地域で活動している両団体間で「てあわせ」の表現映像を送り合っていたりとか、こうした手法で活動を継続したいといった思いが醸成されたと感じる。

加えて、団体 B のメンバーの中には、震災以降、夜遅くの e-mail や日に何度も e-mail が入ることへの心理的負担を訴える者もいたため、当初は、著者が団体 A 内での e-mail のやりとりの内容を、時間や量を調整しながら団体 B に伝え、団体 B からの返信や反応を団体 A に伝える役割を担った。その後、団体 A のメンバーが自身の動画を送る際には、団体 B のメンバーに直接 e-mail を送るという方法で、日を追って、少しずつ、双方のメンバーによるオンライン（リアルタイムではない）での交流は広がっていった。

一方で著者は、オンライン使用に際して、誰もがアクセスしやすい安定した共通の基盤をもつことはできないだろうかと団体 A のメンバーに何度か問いかけた。4月21日に一人のメンバーから〈サイト1〉という仲間内だけで写真・動画の容量無制限共有と掲示板でのファイル共有が無料で行えるサイトを使用する提案がなされた。このサイトをどのようにしたら無理なく使っていけるのかを考えるために、A、B それぞれから運営のファシリテータ（計7名）をだして、映像やコメ

ントの投稿は週に2回、曜日と時間を決めて行うという緩やかな枠を設けたうえで、1週間ごとに新しいアルバムを作成する方法で、5月から〈サイト1〉での交流を開始した。この試みを開始した4月2日から終了した5月末までに、e-mail と〈サイト1〉のコメント欄での言葉のやりとりは、16名（団体A:9名、団体B:7名）による270件であり、表現映像としては、35名あまりの人々による表現動画136、写真38、計174の交流（Fig. 2）がなされた。

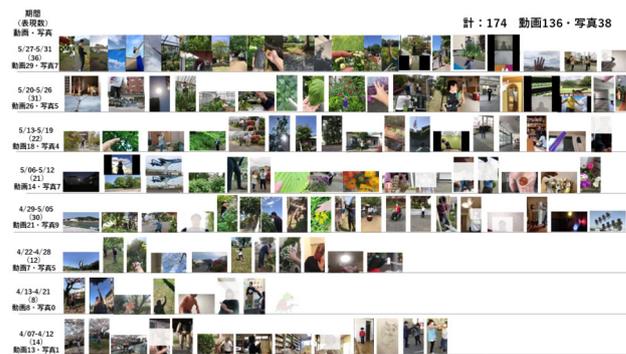


Fig. 2 本実践期間中に送り合った表現映像

3 表現する身体は非同期の世界に何をみいだすのか

3.1 問題意識

本実践では、新型コロナウイルス感染防止のために、「てあわせ」という人と人との直接的な身体接触が表現創出に深くかかわる実践手法を、従来のオンサイト（リアルタイムである）から、オンライン（リアルタイムではない）に転換した。加えて、「てあわせ」を行う相手は、参加者それぞれが生きている環境の人以外のもとなり、これまで継続してきた「てあわせ」を想起しながら、自由な表現を行った際の映像を送り合うこととした。今回、実践手法を対極へと転換することによって、表現する身体における非同期の世界について、これまでは気づかなかつたり曖昧なまま見過ごされたりした事柄がより鮮明に浮かびあがるのが期待される。

本稿での問題意識を列挙すると、以下のようになる。例えば、オンライン（リアルタイムではない）という環境は、録画のためのカメラを意識して動く身体の方に生じるであろう意図を超えた表現の潜在性を、どこまで伝え得るであろうか。また、映像を見ている身体と映像として届けられる身体とが時間的にも空間的にも同時的には存在し得ない環境では、視覚が占有する冷めた知性的領域が優位となり、身体が自ずとかかわりはじめるはたらきは消失してしまうのであろうか。そ

れとも、オンライン（リアルタイムではない）実践手法での表現する身体は、これまでとは異なるストラテジを獲得して、私たちは、新しい環境に独自の身体のはたらきを掬い取ることとなるのであろうか。その際、オンラインを用いることでつながり得る、離れた地域で同じように表現を模索する他者の存在や人以外の環境は、どんな意味を帯びて立ち上がってくるのであろうか。さらに、これまででは当たり前に行ってきたオンサイト（リアルタイムである）でのワークショップのなかで、経験的に蓄積された表現する身体における非同期の世界に対する身体の知は、オンライン（リアルタイムではない）への転換によって、同様のあるいはこれまでとは全く異なる意味をもつことになるのであろうか等である。

以下では、こうした問題意識のもとに、2か月間にやりとりした174の表現映像を検討していく。

3.2 心理的時間の動態

著者が最初に送った2本の表現映像のうちの1本は、散りはじめた桜の木のそばで「てあわせ」を行った動画であった(Fig. 3)。このときの著者には、木と「てあわせ」をするという確たる意図はなかった。外出が極端に制限される日々の中で、学生のいないキャンパスで見事に咲き静かに散っていく花の姿に、特殊な社会状況や人々の思いとは無関係に、季節は確実に移っていくことが、殊更に身体に響いた「2020年の春」と一緒に表現したいと思ったのである。



Fig. 3 表現映像：キャンパスの桜と（撮影2020年4月6日：表現時間11秒）

この動画を撮影した4月6日は、団体Aのメンバーにのみ送信し、翌日の4月7日には団体Bの数名に送った。上記の思いを表現として届ける以外に、団体Bの各メンバーの映像受信環境を確認したいという気持ちもあった。その日すぐに団体BのB1さん（40代・女性）から送られてきた動画は、同じ桜を背景にした親子（B1さんとB1-2さん）での「てあわせ」であった。団体Bのメンバーからのe-mailは、同日のうちに何通か続き、3月に支援学校を卒業した子どもたちの近況や、支援学校は翌日が始業式の予定であったがコロナの影響で20日に延期になったこと、B2-2さん（20代・男

性・発達障害）が自宅で自らデバイスを操作して、著者の表現映像を普段はワークショップには参加していない祖母に見せたことなどが報告された。

4月9日には、B4-2さん（20代・女性・発達障害）が桜の木の下で、1度だけターンしている表現映像が母親から送られてきた。彼女は、発語による他者との言語的交流は困難な場合もあるが、映像からは思いの詰まったターンに「せーの」という掛け声が聞こえてくるかのようなようであった。この時期、日常生活の大きな変化に著者自身の時間や空間の感覚がゆらいでいたことも影響してか、映像を視聴する筆者の身体には、桜や彼女と一緒に表現を創り合っている鮮明な感覚が生じた。

この事例では、映像に映りこんでいる「桜」という共通の個物が、B4-2さんと著者との表現する身体による非同期の世界に相互浸透を促したと考察される。それは、非同期から同期への素朴な移行ではなく、それぞれに固有の表現世界はそのままに、つまりは二人の非同期の世界は保たれたままに、「桜」が薄氷のような糊代や緩い結び目となつての相互浸透である。それだけではなく、関東では例年になく早い開花で、4月初めには散り際となつた桜は、東北では今まさに満開であり、上記の「一緒に」は、「桜」から生まれる時間が逆行する事実とも相俟って、物理的時間の制約である（リアルタイムである）／（リアルタイムではない）は無化されていくような感覚も影響したと思われる。加えて、桜の花が咲き、そして散るという短い期間に私たちが経験する「桜」にまつわるさまざまな思いと感慨が、この春の特殊な社会状況とも絡んで、無意識に押し込められている「余分な記憶が、少し開いた扉から、不法侵入をしてくる」[ベルクソン 2015]かのように、表現を次々と静かに覆い、それに誘発されるかのように、心理的時間の流れに「いま、ここに、生きている」という表現のリアリティが生成し、著者自身の身体に一挙にあふれたように実感される。

思えば、オンサイト（リアルタイムである）のワークショップの場で、こうした共振が起きるときは、均等に刻まれる物理的時間は消え去り、身心が感受する心理的な時間の流れと密度は、それ自体が生命であるかのように伸び縮みしたり、渦を巻いたり、一挙に断ち切られるような感覚が生じる。今回、オンライン（リアルタイムではない）状況で行った本実践において、桜のもとで奔放にターンするB4-2さんの表現に共振する自身の身体を感じ得たことは、表現する身体における共振の生成を考えるうえで、大変興味深い体験であるといえる。

また、オンライン（リアルタイムではない）実践手

法では、自身の身体は動かさずに相手の区切られた表現に向き合うこととなり、その分、自身の内面的な動きが身体により鮮明に浮かび上がる。こうした本実践手法の特徴によって、表現の内側に流れる心理的時間が「未来を侵食し、前進しながら膨らんでいく過去の連続する進展」[ベルクソン 2015]となる動態を垣間見たような感触が得られたと考察される。

3.3 感覚以前

花や木といった植物との「てあわせ」表現や、空へと向かうような、あるいは風を感じながら動くといった自然とかかわる表現は、その後も多くの参加者が好んで繰り返し試み、本実践の重要なモチーフのひとつとなっていった。本実践をすすめた2か月間は、花々の開花や芽吹きから新緑へと植物の変化が著しい時期である。外出を自粛する生活において、近所や近くの公園の散策は、これまでは見過ごしてきたであろう身近な自然の変化を殊更を感じる機会となり、加えて、それらとの表現を試みて映像に収録して送り合うことは、感性の瑞々しさや情緒の安定を保つ一助となっていたのかもしれない。

自然をモチーフとする表現映像では、本人が動き表現する姿よりむしろ、空や風や草花に輝きを発見し驚く個々の感性：sense of wonder[カーソン 1996]が際立って現れるかのようであった。オンライン（リアルタイムではない）という環境が、オンサイト（リアルタイムである）での身体のもつ圧倒的な力動感の奥に潜むこの種の感性を、映像の中で殊更にあらわにしてくれるからであろう。この期間にさまざまな表現を試みた立場から考えると、「てあわせ」の相手を空や草に求めることで、身近な自然は眺める対象から自ずとかかわりあう存在となり、自身の向きあい方の変化により、存在の些細な変化への感受性は思いのほか高まったといえる。さらに、以前は見逃したり見過ごしたりしたものにはっとする感性が、自己の内側で覚醒する実感と、そこでみいだしたものを届け得る他者がいることの喜びや、一体どんな風に受け取られるのだろうかという不安や期待、さらに、送られてくる表現映像の中の何ら装うことなく楽しむ他者の姿に同じ楽しみを感じている自己を重ね合わせることなどが、人との直接的な交流が極端に制限されたこの時期の心性を、よりひらかれたものへとつなぎとめてくれたといえるであろう。

また、オンライン（リアルタイムではない）表現実践では、他者と自己の表現を重ね合わせる際には、オンサイト（リアルタイムである）では存在しない物理的な時間の幅がもたらされる。本実践では、この時間の幅は数分から数時間、時に数日となる場合もあり、自分が

送った映像への返答を心待ちにしている、言葉でも映像でも何ら返答がないかのように、表現の主題が全く別のものへと移っていく場合もたびたび生じた。それでも、待つことにおいて、日常の何気ない瞬間に、送られてきた表現映像に促されるかのように、自己の表現が自身の身体に蘇り、両者が相俟って反芻されることで、より深い感性の覚醒がもたらされる実感が築かれていった。さらに、表現の主題が表向きには全く別のものへと移ってしまったことで生じるあきらめと向き合う時間の中で、それでも、あのとときに送った表現は確かに受け取られたのだということを、形を変えながら進行する全体の表現の流れの中のささやかな変化として、ふと感じ得るほどに、表現に向き合う身体の細やかさが鍛錬されたようにも思える。

この「待つ」や「あきらめる」といった感情は、本実践での表現が、一定の物理的時間の幅をもって進行することで、日常の何気ない瞬間に自身の身体から染み出すように意識化されることとなったものである。こうした感情への気づきや先に示した身近な自然への気づきは、他者の表現の微細な変化を捉える感受性の高まりを生み、それが自身の次の表現に有形・無形の影響を与えるのである。このような連鎖は、実はオンサイト（リアルタイムである）のワークショップでの心理的時間の流れの中ではより凝縮して生じているものの、表現が次々と進行する圧に押されて、十分に意識化されることなく身体の奥に埋もれていくと考えることができる。コロナ禍という特殊な社会状況に対応するために試みた本実践において、意識の俎上にのぼりにくい身体での表現による非同期の世界の内実を、具体的感覚としてつかむことができたことは、大変有意義であったと考察される。

この時期の sense of wonder の覚醒を、さらなる考察の対象とするならば、花が鮮やかに咲いていたり、木々の影が風で揺れて曖昧に漂っていたりする際に生じるこころがゆさぶられる感じは、実はあとからついてくるのであって、その景色、景色以前の気配が、身体をそこへと差し向けているように感じられる経験がたびたびあったと振り返ることができる。不思議なことに、例えば、さきほど「そこ」が美しかったからとか、昨日、こころが大きく動いたからと思って、時間を経て、はやる気持ちを抑えながらその場を再訪しても、花の咲く様子や木々の色は全く変わっていないようでいて、生き生きとした感じはすべて消え去っており、立ち止まることすらしないまま、通りすぎるだけとなってしまっている。

身体が自ずと向かう感覚は、オンサイト（リアルタ

イムである)のワークショップの現場でのファシリテーションの経験と大いに重なる。参加者が数名でも100名以上でも、人々が自在に動く場所には、曇天の日に雲間から光が差し込む光景のように、周囲との等質性を欠く空間が突然に生じる。事実在即せば、身体は先に歩みはじめ、その先に、あたりが浮き上がるように感じる場所ができ、ワークショップでそう感じたときには、ファシリテータとしての身体はすでにそこにあるものとかかわっているのである。その場所で、何がしかのトラブルが生じていることもあれば、唯一の表現が展開されていたり、どうしてもなく表現が停滞していたりと、状況はまちまちであり、ことの大小や質とは無関係に、身体は感覚以前に沿って動きはじめる。もちろん、こちらの身体がおいつかないままに、放置されて消え去ることとなる事柄は、事後的な気づきを得るにいたった事例の何倍もあるには違いない。

著者は、被災地での表現ワークショップを開始した直後から、この地の人々が自然をテーマにした表現を行う際の対象の切りだし方や表し方の独自性に感銘を受け、うまく言い表せないながらも、そのことを何とか現地メンバーに伝えようと努めてきた。本実践では、例えばB3-2さん(10代・男性・発達障害)が広々とした田に向き合い、その景色全体に話しかけるかのようにゆっくりと「てあわせ」をしている表現や、先述のB1-2さんがビニールハウスのトウモロコシと並び立ち、競い合うかのように上へ上へと伸びていく表現、河原で風の流れにのったり逆らったりしながら風と「てあわせ」をするB5-2-1さん(10代・女児)の表現などは、個々の日常に当たり前根づいている、感覚以前に沿って身体そのものが対象へとまっすぐに向かう際に発せられる瑞々しさが、表現映像を視聴しているこちらの身体にストレートに響いてくるものであった。

団体Bの人々が震災を契機に表現と出会い、以降も熱心に活動を継続し、今では主体的運営へと見事なまでの発展をみせた背景には、今回の試みにおいてそうであったように、表現という行為を通じてそれぞれのsense of wonderを生活の中に再認識する楽しさがあったことであろう。それ以上に、震災という想像を超える大きなダメージを地域全体が受けてなお、感覚以前に象徴されるような、見えない世界のさらに奥は、傷つくことなく変わらずに、もしかすると以前にも増して力強く自己に息づいていることへの誇りが、著者のような異なる地域で生きる者との出会いを通じて醸成されたのだとすれば、支援の意味はより深まるであろう。

また、長年にわたる「てあわせ」での表現の経験を通じて、団体Bを運営する発達障害児・者の保護者が、

言語的交流に困難を抱える、家族である発達障害児・者の中に、自己と同等にあらわれるsense of wonderを感じ取ったこと、さらに、感覚以前に沿ってありのままに動く彼らの身体とその表現の鮮やかさに対する憧れにも似た敬いもまた、現地での社会実践をよりひらかれたものへと発展させていこうとし続ける大きな原動力になっていると考える。表現映像の交流と身体からの考察を通じて、団体Bの人々と共に歩んだ10年あまりの歳月に改めて思いを馳せることができた。

3.4 不確定さ

この期間の表現を振り返ると、特に4月後半以降に、オンサイト(リアルタイムである)のワークショップではあまり扱わないモチーフが度々登場していることに気づく。例えば、影、光、鏡、しずく、水たまり、ガラス玉に映りこんだ世界などである(Fig. 4)。これらは、とらえどころがなくあいまいで、幅や厚みが定まらないゾーンを行き来するような表現をもたらす点で共通している。

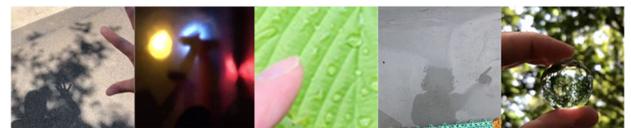


Fig. 4 表現映像：あいまいなものとの「てあわせ」

著者は、4月14日に影との「てあわせ」を試みた。これまでも身体を影をテーマとする表現の社会実践(Fig. 5) [注1]や、シャドウ・メディアの研究[Miwa et al. 2011]などで人工的な影を含むさまざまな影との表現を経験してきたが、誰もいない広場で、自分の影とだけ向き合ってみると、身体が浮遊するような、地面やさまざまなものに潜り込んでいくような、格別な身体感覚が生じた。自分の影が地面に現れて木をスルスルと登っていくと、影が登っていく木にもやはり影はあり、影同士が引き合うことで身体はそちらに持ち出されていくようでもある。身体と影、個物とその影、風による



Fig. 5 身体を影をテーマとする表現の社会実践(「影で出会う・影でつながる」: 国立民族学博物館文化資源プロジェクト 2010年3月)

影のゆらめき、光の具合による影の濃さや輪郭の変化といった、刻々と移り変わる多重な世界の中で、自己の位置取りは危うくなり、軽くなり、重くなり、空間のあちこちを移りつつ、一か所でうごめくかのようなのである。

コロナ禍以前、著者が表現ファシリテータを担う団体A・Bのオンサイトー〈リアルタイムである〉のワークショップには、実に多様な人々が集い、その現場はいつも雑然としている。身体での表現は必ず行わなくてはならないものではなく、熱心に表現する人、見ている人、表現の途中で中断する人、別のことをしている人、部屋をでていく人、途中から入ってくる人等が常に入り交じりながらワークショップは進行する。こうした定まらない環境において、即興的な身体表現である「てあわせ」は、生き生きと展開していくのである。そのようにして長年続けてきたワークショップが、新型コロナウイルス感染症の拡大によって突然中断となり、ちょっとした外出もままならない閉塞的な日常生活が数週間続いた。著者も含め本実践の参加者は、自身もそれとは気づかないうちに、定まらないからこそその自由な空気感を求めて、それぞれの日常の中に、影や水たまりといったとらえどころのない不確定なものとして表現する際に身体が感じる面白さや心地よさを発見していったのだと考察される。

著者が送った影の動画に表現で応答したのは、団体BのB5-2-2さん（10代・女兒・発達障害）であった。普段のオンサイトー〈リアルタイムである〉のワークショップでは集団の中で表現することは少ないが、こころゆさぶられる場面には集団の外側からすっと入ってきて、思いのままを表現して、いつのまにかいなくなる。そんなB5-2-2さんから送られてきたのは、桜の木の下で、一人で自分の影を楽しげに追いかけ、それと「てあわせ」している動画であった。影はもちろん彼女自身であり、影を介して著者と表現を創り合っているようでもあり、それ以上に、限定できないさまざまなものたちとの対話に夢中であるようにも受け取られて大変興味深い。これまでのオンサイトー〈リアルタイムである〉ワークショップにおいて、彼女自身をみんなの輪へといざなうのは、一緒に参加している父母や兄弟、馴染みのあるメンバーではなく、ファシリテータである著者でもなく、きっとこんな風に、次々と身体を通り抜けていく、あいまいで不確定なものたちなのであろう。

一方、普段のワークショップでは、周囲に座っていることの多いB1-2さんからは、自宅の姿見の前に立ち、身体を斜めにして鏡をじっと睨み、自身の鏡像との「てあわせ」を試みている動画が送られてきた。じりじりとした集中度には目を見張るものがある。送られた映像

の鏡の内には、彼には馴染みのある自宅の部屋とB1-2さんだけが映っていた。そうではあっても映像は、懸命に表現しようとする彼の姿を捉え、こちらの身体もピリピリとするような高い緊張感を伝えている。彼にとってのオンサイトー〈リアルタイムである〉のワークショップの場は、鏡像が映し出すようなとらえどころのない世界であり、しかもそこには、馴染みのある景色や自分の姿はなく、先に述べたように、参加者やそのふるまいが固定されることがないだけに、不確定で雑多な他者だけが映りこんでいるのであろう。そうではあっても、彼自身は、ワークショップの年月を重ねることで、足元がすくわれるような不確定さと全身で対峙しながら、「てあわせ」に主体的に参加する場面を確実に増やしてきたのである。被災地でのワークショップを開始した当初は、母親や著者に促されて汗をびっしょりかきながら何とか数秒だけ表現の輪にとどまっていた彼が、数か月後には、緊張の度合いが高まるとポケットからハンカチを取り出して口に詰め込んでから表現するようになり、数年後には、ハンカチに代えるように表現しながら決まった言葉を繰り返し発することで緊張を和らげ、時々笑顔を見せてみんなの中にとどまり続けて、自らすすんでワークショップ参加者との「てあわせ」を行うようになった。この間のB1-2さんの変化を省みると、多様な人々でのオンサイトー〈リアルタイムである〉ワークショップには参加しないことで不確定さから距離を置くことや、決まった相手とだけ「てあわせ」を行うという具合に不確定さを解消する方向ではなく、不確定さが彼にもたらす極度の緊張をやりすごす術を自分自身でみいだす方向を選択することで、何よりも「てあわせ」という即興的に表現を創り合う場を彼なりに尊重し、そこに継続して参加することを優先してきたことに気づかされる。彼の表現への信頼は非常に篤く深いことを、あらためて確認することができた。

オンラインー〈リアルタイムではない〉で展開されるさまざまな人々の表現映像を通じて、多様な人々がそれぞれのやり方で参加するオンサイトー〈リアルタイムである〉のワークショップの不確定さを、オンラインー〈リアルタイムではない〉では表現のモチーフに求める参加者の姿が確認され、あらためて多様な人々による表現の場の意味とそれが維持されることの大切さを実感した。また、物理的な時間や空間に関係なく、あいまいでとらえどころのないものを楽しげに向き合うB5-2-2さんの自由さや、身体が不確定さにさらされるとき強い不安や緊張とその先に結実する表現への信頼を示すB1-2さんの強さを捉える契機を得たことは、実践者として大変有意義であったといえる。

4 まとめ

本稿が対象とする実践では、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、多様な人々による創造的な身体表現のワークショップの実践手法を、オンサイトー（リアルタイムである）からオンラインー（リアルタイムではない）へと転換し、2020年4月から2か月間の表現映像の交流を行った。本稿では、この実践手法の転換によって図らずも逆照射されることとなった「表現する身体は非同期の世界に何をみいだすのか」について、実践の内にある著者自身の身体を基盤に、意識に浮かび上がってきた事柄を「心理的時間の動態」、「感覚以前」、「不確定さ」という3つのキーワードから検討した。

「心理的時間の動態」に関しては、表現映像の交流を通して、オンラインー（リアルタイムではない）という実践手法においても、身体が共にあるときの身心の共振感覚が生じることが確認され、共振の生成基盤について大きな示唆を得た。また、オンラインー（リアルタイムではない）がもたらした物理的時間の幅によって、これまで継続してきたオンサイトー（リアルタイムである）のワークショップでは追いきれなかった、自身の内面の動きが次々と連なるように想起され、表現する身体に流れる心理的時間の動態が具体的感覚として経験された。

「感覚以前」に関しては、オンサイトー（リアルタイムである）のワークショップとは異なり、それぞれの参加者が日常生活の中での表現を試みたことで、身近な自然との表現がもたらす感性の覚醒や、その延長として、感覚以前に触発されてたちあがる身体独自の行為を捉えることができ、その記述と考察が進んだ。

「不確定さ」に関しては、2か月間の実践が進むにつれて、オンサイトー（リアルタイムである）のワークショップでは殆ど扱わない「とらえどころのないもの」との表現が多く出現した事実から、コロナ禍以前のオンサイトー（リアルタイムである）のワークショップがもつ、多様な人々によって築かれる不確定さの大切さを再確認することができた。さらに、「不確定さ」を視点に、これまでのワークショップにおける特に発達障害のある参加者の表現や参加の在り様を振り返り、新たな捉え方を築く契機となった。

今回の実践において、著者自身の身体感覚を通じて意識に浮上した事柄を検討した「心理的時間の動態」、「感覚以前」、「不確定さ」は、そのいずれもが表現する身体が創造へと向かう際に極めて重要であるにもかかわらず、それ自体のはたらきをオンサイトー（リアルタイムである）での表現中に、自身の意識の内に捉えるこ

とや可視化して確認することは極めて困難であるだろう。しかしながら本稿では、表現する身体は非同期の世界において、心理的時間の動態や身心の共振を感受すること、他者や環境とのかかわりの中で感覚以前に沿って行為すること、さまざまな感情のもとに不確定さを求めること等によって、常に新たに表現を生成し続けていくことが明らかとなった。

表現というと、特殊な技術や技能が必要であり、非日常の世界に没入し、自己をかけて挑んでこそ成し得ると考える人は多いと思う。しかしながら、著者をはじめ、本実践に参加した人々は、William Blake の有名な一節[注2]やベルクソンの言葉[注3]が示すように、こころゆさぶられる体験の源は、日常にある私たちの身体と同じく、常にゆらめきながら「いつでも・すでに・そこに・ある」ことを自ら体験し得たことであろう。そのことによって、今後の表現や生きることそのものに、オンサイト/オンライン、〈リアルタイムである〉/〈リアルタイムではない〉にかかわらず、広がりや奥行きがもたらされることを期待したい。

一方で、本実践の参加者の多くは、長年にわたって身体での共創表現に携わっている人々である。また本稿では、身体での表現の独自性がより鮮明に浮かび上がる対象として、言語的交流に困難を有する障害のある参加者の表現を多く取り上げた。さらにひらかれた表現環境や未知の人々が参画する場合については、今後の実践と研究を待たなくてはならない。

2020年春、人にふれることなく、ふれないことでより鋭敏化する「ふれる」を、風と空、木々や虫と試しながら過ごした途方もなくのびやかな時間の流れのなかで、加えて、オンラインー（リアルタイムではない）という新たな実践手法で柔らかに表現する個々の身体の在り様を通して、著者自身の身体は、非常に多くを学んだ。これからの実践の糧としていきたい。

謝辞

本実践を共にすすめた2つの団体と参加者に感謝いたします。本稿の執筆にあたり、三輪敬之名誉教授（早稲田大学）からは、多くの意見と示唆をいただきました。また、査読者からも貴重なコメントをいただきました。なお、本稿の一部は、JSPS 科研費 17K01645 『『共創するファシリテーション』理論の構築と現場への活用』（研究代表者：西洋子、研究分担者：三輪敬之（早稲田大学）、郡司幸夫（早稲田大学））の助成を受けたものです。

参考文献

- Miwa, Y., Itai, S., Watanabe, T., and Nishi, H. (2011). Shadow Awareness: Enhancing theater space through the mutual projection of images on a connective slit-screen, *Leonardo, the journal of the International Society for the Arts, Sciences and Technology (SIGGRAPH 2011 Art paper)*, 44(4), 325-333.
- 市川浩 (1997). 身の構造—身体論を超えて—, 青土社.
- 河合隼雄 (1998). 河合隼雄対談集「こころの声を聴く」, 新潮社.
- レイチェル・L.カーソン, 上遠恵子訳 (1996). センス・オブ・ワンダー, 新潮社.
- 九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ (2020). ダンス制作をオンラインで. その成果を発表, https://www.design.kyushu-u.ac.jp/_cms_dir/wp-content/uploads/2020/11/0c978827f3c4f2c680ac1c5bf039d672.pdf, accessed on 10.27, 2020.
- 郡司ベギオ幸夫 (2019). 天然知能, 講談社選書メチエ.
- 坂本龍一 (2017). 理想の音は雨の音, 真の自由を求め原点へ, https://wired.jp/waia/2017/30_ryuichi-sakamoto/, accessed on 11.17, 2017.
- 東京芸術劇場: 東京のはら表現部(2021). 2020年度の活動, https://www.geigeki.jp/performance/tokyonohara_2020/, accessed on 2021.
- 中村雄二郎 (1993). 共振する世界, 青土社.
- 西洋子 (2012a). 出会いと共振—「共振する身体」から「共振する生命」へ—, *死生学年報*2012, 87-10.
- 西洋子 (2012b). 表現するからだ—共創の原初、未来への跳躍—, *計測と制御*, 51 (11), 1072-1075.
- 西洋子, 三輪敬之 (2016). 被災地での共創表現と共振の深化—このフィールドは、何を語りかけているのか—, *アートミーツケア学会オンラインジャーナル*, 7, 1-18.
- 西田幾多郎 (1923). 芸術と道徳, 岩波書店.
- アンリ・ベルクソン, 原章二訳 (2013). 思考と動き, 平凡社.
- アンリ・ベルクソン, 合田正人/松井久訳 (2015). 創造的進化, 筑摩書房.
- 松本千代栄 (2008). 松本千代栄選集・舞踊論叢, 明治図書.
- 三輪敬之 (2019). 共創表現のダイナミクス—実践, 理論, システム技術—, *共創学*, 1 (1), 23-30.
- 村澤真保呂・村澤和多里 (2018). 中井久夫との対話—生命, こころ, 世界—, 河出出版書房.

[注1] 2010年3月に国立民族学博物館の文化資源プロジェクト「表現で出会う・表現でつながる」として実施したミュージアムでのワークショップ(代表: 国立民族学博物館特別客員教授・西洋子) <https://older.minpaku.ac.jp/museum/event/workshop/100321-22>

[注2] William Blake, による *Auguries of Innocence* の以下の一節を指す。
To see a World in a Grain of Sand
And a Heaven in a wild Flower
Hold Infinity in the palm of your hand
And Eternity in an hour

[注3] ベルクソン (2013) p214の以下の文章を指す。
しかし、私たちはそれを見ていたのですが、それに気づかなかったのです。それは私たちにとって輝かしく消えていく光景であり、同じように輝かしく消えていく他の無数の光景の中に消えていたものなのです。